

日本語教育の中での敬語表現の扱い方

坂本 恵

(2001.10.31 受)

0 はじめに

「敬語」を考えると、語彙としての敬語、狭義敬語のみを考えていたのでは十分ではないという考え方はかなり一般的になっていると考えられる。「待遇表現」という言葉は研究、教育面では一般的になってきており、その捉え方での研究も進んでいると言える。

この考え方は日本語教育にどのように反映されているだろうか。従来は「敬語」といえば、初級の最後の方の課にまとめて示され、尊敬語謙譲語といった語の一覧などがあげられているという形が多かった。最近では初級のはじめの方から、「母」「お母さん」の区別、「人」に対する「方」、「どちら」「あちら」といった項目が扱われていることが多い。授受表現の「いただく」「くださる」はたいていの教科書で初級の後半で扱われているようである。そのほかの、「いらっしゃる」「おっしゃる」などいわゆる尊敬語、謙譲語はまとめて初級の最後の方で扱われていることが多い。カジュアルとフォーマルなどの形ではじめから文体を分けている教科書もみられる。

筆者は日本語教育の中で「敬語」「待遇表現」を扱う際、どのように扱っていけばいいのか考えてきた。今後、どのような方向で考えていけばいいのかをまとめておきたいと思う。

1 「敬語」と日本語教育

日本語教育で敬語を指導しようとするとき、「敬語」は日本語に特有な難しいものであるとして敬遠されたり、上下関係による封建的なものであるしてと拒否する姿勢を示されたりすることもある。逆に、「敬語」を使いたいと思うあまり、使わなくてもいい場合にも使ったり、間違った使い方をしたりしてかえって失礼になってしまう学習者もいる。このような問題は従来の上下関係に基づくものとしての「敬語」の考えから、また、「敬語」を語彙的な問題として狭義敬語だけを教えようとするところからくるのであろう。

一方、「敬語」だけではなく、広く相手や場によって表現を変えるという意味で「待遇表現」として考えてみるならば、そのような相手や場による使い分けは多くの言語でも共通して行われるものであると言える。その意味では「敬語」を含む待遇表現は日本語だけにある特異な事実ではなく、かなり普遍的なものであると言ってもよいだろう。その使い分けのバリエーションの数が多く、かつ、特別の語彙を多く持っていることが日本語の特徴であろう。この、特別の語彙こそが狭義敬語であるが、「敬語」としてとらえられる故に、ここに必要以上の注意が向けられていたのがこれまでの問題であったと言えよう。日本語の待遇表現のもう一つの特徴は、使い分けの多くが規則化され、規範を多く持っていることと言ってよいだろう。この使い分けを学習することは学習者にとって非常に重要であるにもかかわらず、それほど体系的に教えられていないのが現状であろう。体系的に教えることさえできれば、日本語の待遇表現はかなりの部分が規則化されているともいえるため、逆に習得しやすいものになるのではないかと思う。

また、敬語、待遇表現に関することは中級以上の項目として初級ではあまり扱わないという考え方もあるが、初級でも扱われている「ですます」体と普通体の使い分けなどは待遇表現の中でかなり大きな位置を占めることであり、初級から扱わないわけにはいかないだろう。初級、中級、上級と進む中で何をどう扱っていけばいいかということを全体を通した形として指導していく必要があるのではないかと考える。

2 何を教えるか

「敬語」では十分ではないことはわかっている、では何を教えるのか。敬語はいわば、待遇に関する言葉遣いのプラスの部分の特殊な語彙であると言えるが、「待遇表現」というと、プラス、ゼロ、マイナス面すべて、そして、特殊な語彙に限らず、相手や場によって使い分けられているすべての語彙、表現など、非言語行動まで含めたものである。日本語教育では最終的にはこのすべての部分を扱う必要があると言えるが、「敬語」に代わる一つの項目として考えるならば、この一部、プラスの部分を取り出して積極的に扱っていかねばならないと言うことであろう。その、プラス部分の「敬語」に相当する、「敬語」より広いもの、を表す適当な共通の理解の得られた用語が現在見つからない状況である。ここでは「敬語表現」を使っていくことにする^(註1)。

日本語教育の中で「敬語表現」を扱う。その場合、どのような場合にどの形を

使うといった語の形式はもちろん重要であるが、それ以上に何をどう考えるか、どのようにとらえて表現するかということが重要である。

「敬語表現」は学習者にとっては母語にはない、あるいは、母語とは違った新しい考え方であると言え、習得するためにはまず考え方を理解することが重要である。「敬語表現」の考え方を表す言葉として、「丁寧」「ポライト」だけでは十分ではない^(#2)。たとえば、あなたの国「お国」、私の国「国」と導入したとき、学習者に自分の国は尊敬しない、という反応をされた。自分の国を尊敬しているから使う、自分が尊敬しているものに対して使うといったものではないことなどは、敬語の考え方、敬語の仕組み、システムであるといえる。「お国」と「国」の使い分けは、「国」に対する敬意、配慮を表すのではなく、相手に対する配慮を示すものである。人称詞をあまり使わない日本語の中では、自分と相手の区別をこのシステムで行っているわけである。また、「お国」と「お茶」は初級のはじめから扱われることも多いが、相手に対する配慮として使われる「お国」と、一般的にきれいに表すために使われる「お茶」とは意味が異なる。つまり、同じ「お」であっても直接尊重語と美化語^(#3)という違いがあるわけである。このような考え方や仕組みについて現在の教育の中では十分に説明しているとは言い難い。この考え方や仕組みは初期から理解させる必要がある。これらは「丁寧」だけでは十分に説明できないものである。つまり、敬語表現を理解させるためには、何に対して配慮を示しているのかということ、相手に配慮するということを相手を高めるとする方法で行うというようなシステム、相手を高めるためにどのような語彙を使って表すのかというような具体的な表現、そして、それをいつ、どのように使うべきかという相手や場面をどうとらえ、どう判断するか^(#4)の基準などを理解させる必要がある。

しかし、説明だけすればよいと言うものでもない。敬語表現が適切に使えるようになるためには、適切な説明による理解の後、実際の用例などの観察、そして練習が必要になるだろう。また、実際の表現場面での相手や場の捉え方の基準も示し、適切な判断ができるようにさせなければならない。そして、場面の中で使えるように練習させることが必要になるだろう。

そのために、まずこれらの概念を客観的にとらえ、必要な場合には適当な名称を付けておく方がよい。決まった用語を決めておいてその都度説明する方が理解させやすいと思う。敬語表現に関しては用語が確定していないものが多いが、説明のためには決めておく必要があるだろう。

考え方の説明は重要であり、初級のはじめから必要となるものである。初級での説明は媒介語によるものがよいだろう。各国語版の文法説明書のようなものの中でしっかり説明し、理解させたい。

3 日本語教育で使われるべき敬語表現の用語

敬語表現についての筆者の考え方、システムについて、特に初級、中級でどのようなことを扱っていくべきかを考えてみたい。

まず、教育の中での説明のために必要な考え方を説明するために、いくつかの用語を確定しなければならないだろう。たとえば、「敬語表現」の使われる原理は「丁寧」だけでは十分ではないことは前に記したとおりである。「丁寧」だけでは十分ではない、丁寧さを表す用語が必要である。また、敬語を使った言い方と敬語を使わない言い方をそれぞれ何と言うかという質問を受けたことがあるが、それらを表す適当な用語がないのも事実で、これを説明しやすい用語で表しておく必要もあるだろう。また、狭義敬語に関しても、従来の「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」の3分類は現在の用法とそぐわないものとなっているので、教育の場でもせめて「丁重語」「美化語」を加えた5分類にする必要があると考える。5分類にしてもそれらの気持ちを持っているかどうかの問題になると言う点で誤解を招きやすい「尊敬」「謙讓」などを使わない用語にしたいものである。これらについての現在の私案を示しておく。

○敬語表現の表す配慮の対象（プラスの方向）

人：立場、年齢などが上位である人（親しさはマイナスの方向）

場：改まった場

状況：相手が忙しい、困っているなどの場合、自分にとっては難しい、大変なものである場合（状況がマイナスのものであるときに、配慮が必要な、プラスのものとなる）

○狭義敬語の5分類（ ）内は従来の5分類での用語

「直接尊重語」（尊敬語）

「間接尊重語」（謙讓語）

「丁重語」（丁重語）

「美化語」（美化語）

「丁寧文体語」 (丁寧語)

- 敬語表現の表す「丁寧」の具体的な形（ここでの狭義敬語は11分類のもの）

尊重語に代表される動作主などを高める働き	高め
授受表現で表される自分側に対する恩恵を表す働き	親切
場レベルを決定する改まる働き	改まり
美化語に代表される言葉をきれいにする働き	きれい
尊卑語に代表される自分と相手を分ける働き	自分／相手
流れを作ることなどで相手の状況、用件にあわせる働き	気遣い

- 狭義敬語が使われるかどうかを文体全体の問題として考えたもの。相手のレベルを考える際にも、文体をそろえることを意識させるためにも有効。
 - 「マイナス1レベル」
 - 丁寧文体語（「ですます」）が使われないいわゆる普通体
 - 「ゼロレベル」
 - 丁寧文体語のみが使われ、直接間接尊重語が使われないレベル
 - 「プラス1レベル」
 - 直接間接尊重語も使われるレベル

- 相手のレベル 「高め」が必要かどうかで決定される 文体のレベルと連動
相手レベル プラス1／0／マイナス1

- 場のレベル 「改まり」により決定
場レベル プラス1／0／マイナス1

4 初級での扱い

敬語表現の考え方を媒介語で説明することは初級のはじめから必要であり、初級からこの考え方に沿った教育をすることはできるだろう。敬語表現の考え方を取り入れた初級、中級の組み立てを考えることもできると思う。しかし、ここでは、現在行われている教育の中で具体的にどのようなことを付加的な形で示せるかを考えてみたい。

まず、以上にあげたような用語を示しながら教えることは、敬語表現の意識化

に役立つであろう。具体的には、相手自分の区別、文体の区別、相手のレベルと場のレベルなどの考え方である。初級ではゼロレベルと、普通体が出てきたところでマイナス1レベルの区別をしっかりと説明することが必要になるだろう。マイナス1レベル（普通体）はきちんと教えなくても、日本で生活し、テレビやそのほかの日本人との接触の中で学生は自分で習得してくるものである。使うことはいいとしても、その表す意味を教えておかないと、ゼロレベル（丁寧体）が使えないようになってしまうおそれがある。マイナス1レベルに慣れてしまって、ゼロレベル以上が使えないということはアルバイトをしている就学生や学部在籍する留学生の日本語の大きな問題と言えるものである。アルバイトなどでマイナス1レベルを身につけてしまい、ゼロレベルが使えなくなってしまうのである。この使い分けは早い時期から意識して教える必要がある。

また、敬語表現は原則としては人、特に今話している相手に対するものであり、その相手に対し、相手のことを考える、自分を押し付けない、相手の動作を自分への恩恵として捉えることが相手に対する配慮になるという敬語表現の基本的な考え方を示す必要がある。そして、具体的にはその観点をよく表している授受表現、恩恵系を敬語表現の観点から扱い、練習を重ねることであろう。授受表現に関しては、自分の行為である「てあげる」系、格関係が変化するので意識しやすい「てもらう」系は比較的習得しやすいが、他者の行為を自分の恩恵としてとらえるという意識なしには表現できない「てくれる」系の習得が難しいことはよく知られていると思う。ある意味では「てくれる」系は日本語の敬語表現の一つの特徴を表すものであり、この意識を身につけることが敬語表現習得の一つのポイントであると言えよう。

初級の文型からはずれるものは教えるににくいものであるが、日本人との接触を考えると、挨拶、決まり文句的なものは積極的に扱ってもよいのではないかと思う。これは分析して文法、用法を詳しく教えるのではなく、場面を作り、その中で使えるようにするという練習が必要となるだろう。会話の中で、よく使われ、使いやすい表現を選び、早い時期から教えることは可能である。「機能会話」などとして扱われているものであるが、依頼の場合の「～していただけませんか」や、「いいですか」と言われた場合の返事、「お願いします」などである。「ありがとうございます」が単なるお礼の言葉というだけでなく、ほめられた場合の返事や、家に招かれたり、ごちそうしてもらった場合などに積極的に使うべき言葉として注意させることなども含まれる。また、「ちょっといいですか」や「すみません」

などの会話の切り出しの言葉や、「楽しみにしています」などの決まり文句なども積極的に扱ってよいように思う。日本人との接触の中で必要だと考える学習者も多い。また、逆に危険な表現、知らずに失礼になってしまいかねない表現、たとえば、「いいですか」の返事として多用される「いいです」は場合によっては尊大な印象を与えかねないものであり、初級の最初は仕方ないとしても、初級後半からはあまり使わせたくないものであるが、そのような表現に注意を向けることも必要になるだろう。

恩恵系（授受表現）以外の狭義敬語、直接、間接尊重語に関しては、初級では理解させるだけで十分ではないだろうか。使い方の練習は中級に回してもよいと考える。間違った使い方、不十分な使い方はかえって失礼になりかねない。敬語動詞の使い方の練習だけではなく、中級になって場面の中で自然に使えるように指導していくようにしたい。

5 今後の課題

以上のような考え方の元に、用語を確定した上で、初級、中級での教え方を整理し、教材化を考えていきたいと思っている。さらには、敬語表現の考え方に基づいて一貫して編集された、初級、中級の教科書、教え方を考えていきたいと思っている。

注

注1 「待遇表現」「敬意表現」「敬語表現」など、概念の違う用語がいくつかあり、使い方も確定しているとは言い難い。「敬語」も研究的立場からは定義は確定しているが、一般的にはいろいろな意味で用いられるようである。適切な、一般的に確定した用語がないことはこの分野の研究の大きな問題であると言えよう。ここでは、ここにあげたような意味で「敬語表現」を使うこととする。

注2 「丁寧さ」と今よく言われる「ポライトネス」は同じものではないようである。「ポライトネス」に一番近い日本語の概念は「配慮」であろう。

注3 狭義敬語の分類、名称はすべて 蒲谷・川口・坂本1998『敬語表現』（大修館書店）による

How Should Teachers Teach KEIGO?

SAKAMOTO, Megumi

Learning KEIGO should be encouraged from the early elementary level rather than waiting until pre-intermediate in teaching Japanese as a second or a foreign language. A thorough comprehension of the basic components of KEIGO use—the person you talk with, the occasion where you should sound polite and other socio-linguistical elements—is critical. Contextualized practices, as well as those for morphological transformation of KEIGO verbs, are inevitable to develop a command of KEIGO expressions in real communication settings.